

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 謝惠貞

台湾が日本植民地統治を受けた 1895 年とは、中国本土の「国語」制度普及開始よりも四半世紀以前のことで、台湾総督府は明治日本の国語制度を施行し、台湾人は植民地体制克復の糧として日本語を学んだため、1937 年新聞漢文欄廃止後には日本語読書市場が形成され、日本語文学は 30-40 年代に全盛期を迎えた。一方 20-30 年代の日本文壇は欧米モダニズムに注目し、横光利一らが新文体を創造していた。本論文は台湾作家が新感覚派を中心に、創造的に日本文学を受容し台湾人意識を構築していく過程を論じたものである。

第一章「1932-36 年横光利一受容の概観」は、プロレタリア文学作家楊逵(ようき、1905-85)ら台湾作家が内地文芸復興に寄せた関心の広さと深さを検討し、第二章「明治大学での師事：横光利一「頭ならびに腹」と巫永福「首と体」」は、明大文芸科における横光や小林秀雄らと巫永福(ふえいふく、1913-2008)との師弟関係に関する調査を通して、その日本語文体の模写から創造への過程を考察した。第三章「構図としての「意識」発見：横光利一「時間」と巫永福「眠い春杏」は、「査某嫺」(ツァボカン、伝統的少女奴隷)の内面描写を求める台湾文壇の要請に対し、巫が横光の新心理主義作品に物語内容としての「意識」を発見し、「夢現(ゆめうつつ)」描写を通して三人称と一人称の境界を越境、査某嫺の主体回復を描き出し、台湾作家としての「主体性」確立を分析した。

第四章「植民地的メトニミーの反転：横光利一「笑はれた子」と翁鬧「羅漢脚」」は、翁鬧(おうとう、1910-40)を新感覚派と評する先行研究の誤認と、彼の台湾郷土描写作品における志賀直哉からの影響関係を指摘し、単なる写実とは異なる「描写の具象性」を主張する翁鬧はメトニミーとメタファーとの相乗効果を目指したものの、同時代文壇からはリアリズムの実践として評価されてしまった点を論じた。

第五章「翻訳による権威の流用：横光利一「皮膚」と劉呐鷗「遊戯」」は、1920 年代末から 30 年代にかけて上海で文学・映画活動に従事した劉呐鷗(りゅうとつおう、1905-40)が、日本新感覚派作品を翻訳、横光の模作を執筆する過程において、台湾福建語調の中国語白話文を逆手に取っての翻訳、自己資本の前衛出版社開設による新文体の普及、新文体の語り手の主体を中国男性に定めることによる上海主流読者の信頼獲得という「三つの書き換え」翻訳戦略を展開した点を分析した。終章は横光の文学論と表現技法との楊、巫、翁、劉による受容を総合的に検討し、類似点と相異点(定義の誤謬)を指摘し、「台湾新感覚派」という文学史的新概念を提起した。

本論文はジョイスなど横光以外のモダニズム受容径路の検討になお課題を残すものの、1930 年代台湾作家たちが、「借り物」の日本語を逆手に取って受容者から発信者へと轉身し、自らの民族的視点に立って郷土下層民の描写に至り、クレオール性に富む独自の「台湾新感覚派」を形成していく過程の解明を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。